

『完成せるヨーガの環』研究(三)

立川武蔵

本編はアバヤーカラグプタ編『完成せるヨーガの環』

Nispannājogavali (NPY) (第十三―十八章) の和訳であるが、拙

稿『完成せるヨーガの環』第二章訳注』『愛知学院大学文学部紀

要』第三十五号一二三―一二九頁、『完成せるヨーガの環』研究

(一)』『愛知学院大学文学部紀要』第三十六号一二九―一四四頁お

よび『完成せるヨーガの環』研究(二)』『愛知学院大学人間文化

研究所紀要』第二十二号一七九―一九八頁に続くものである。

なお NPY 第十一章訳については森雅秀『完成せるヨーガの環』

第11章「ヴァジュラフーシカラ・マンダラ」訳およびテキスト

『高野山大学論文集』高野山大学、一九九六年、一〇―一二四頁

を、NPY 第十二章独訳については R. O. Meizezahl, *Hastapūjā-*

vihī-Texte, VGH Wissenschaftsverlag, Sankt Augustin, 1985,

pp. 15–17 を参照された。

テキストは、バットチャルヤ版 ([Bhattacharyya 1949] 略号

Bh) を基本とし、リー版 ([Lee 2004] 略号 Lee) をも参照した。

現在、二十本以上のサンスクリット写本が残されているが、それら

の内、特にアーシヤー・サフクティ (カトマンドウ) 所蔵 No.

2-146 (略号 C)、ネパール国立公文書館所蔵の No. 3/687 (略号

E) および No. 1/1113 (略号 G) ([Bühnemann & Tachikawa

1991] に所収)、世界宗教高等研究所 (Institute for Advanced

Studies of World Religions [IASWRL, New York] 所蔵の MMB II-

224 (略号 R) を参照した。他の写本に関しては [Bühnemann &

Tachikawa 1991: xvii–xix] [森 1994: 143–140] [立川 1995: 2] を

参照された。

訳注はバットチャルヤ版を訂正した箇所など最小限に留めた。

第十三章 ブツダカパーラ・マンダラ (二)^①

1 楼閣と中尊

世尊二十五尊ブツダカパーラのマンダラにあつては、金剛籠の内
の法源の中央に建てられた楼閣の中に、青黒い八輻輪の上にある八
弁二重蓮華の花芯の上に横たわる死体があり、その心臓の上の日輪
の上に世尊ヘールカ〔ブツダカパーラ〕(1) がある。〔身色は〕青
黒で、半伽の姿勢をとり、九種の演劇の「味」を伴って踊つて
いる。^② 一面で〔血で〕赤く丸い三眼と四臂とを有し、右二手にダマ
ル太鼓とカルトリ刀を、左二手に頭蓋骨杯とカトヴァーンガを持
つ。六つの〔骨〕飾りを付け、人の生首五十から成る環を首から掛
け、背後には象の皮を垂らしている。二重金剛と三日月を付けた青
黒い捲き毛を結び、五つの頭蓋骨を額に付け、五仏〔の化仏〕を付
けている。

かの主尊〔ブツダカパーラ〕の妃はチトラセーナであり、衣を
まとわず、人の首で作られた環を掛け、燃えあがるような黄褐色の
ほどけた髪を逆立たせ、五つの頭蓋骨を額に付け、わずかに牙をむ
き、一面三眼を有する。赤い光背を有し、彼(夫)の首に左手をま
わしている。その左手にある頭蓋骨杯から経血が流れ落ちて
いるが、彼女はその血を夫に飲ませている。彼女の右手は〔敵を〕殺す

仕草をしながらカルトリ刀を持つ。

2 四方の輻の女神たち

東方の輻には、青黒い輻の上の花弁にスマーリニー(2)、北方
〔の輻〕にはカパーリニー(3)、西方〔の輻〕にピーマー(4)、
南方〔の輻〕にドウルジャヤー(5) がある。

3 四維の花弁

北東等の花弁には、右回りに精液、経血、五甘露^④、灯〔明
肉〕^⑤に満たされた頭蓋骨杯がある。以上が第一重であり、青い
〔ニーラ〕^⑥ 金剛の環に囲まれている。

4 第二重の神々

次に第二重は、赤い八輻〔輪〕の上にある八つの蓮華の上にあ
り、赤い金剛の環によつて囲まれている。

東の輻にはシュバメーカー(6)、北〔の輻〕にはルーピニー
(7)、西〔の輻〕にはヴィジャヤー(8)、南〔の輻〕にはカーミ
ニー(9)、北東〔の輻〕にはカパーリニー(10)、南東〔の輻〕に
はマホーダディ(11)、南西〔の輻〕にはカーリニー(12)、北西
〔の輻〕にはスマーリニー(13) がある。

5 第三重の神々

次に、第三重は白い八輻〔輪〕の上にある八つの蓮華の上であり、白い金剛の環によつて囲まれている。その東輻にはターリニー(14)、北〔輻〕にはビーマダルシャナー(15)、西〔輻〕にはスダルシャナー(16)、南〔輻〕にはアジャヤー(17)、北東〔輻〕にはシユバー(18)、南東〔輻〕にはターダカー(19)、南西〔輻〕にはカーララトリー(20)、北西〔輻〕にはマハーハーサー(21)がいる。

6 四門の女神

東門において蓮華の上にスタンダリー(22)、北門の蓮華にはヴァジュラスンダリー(23)、西門において蓮華の上にはスバガー(24)、南門の蓮華にはプリヤダルシャナー(25)がいる。

7 女神たちの姿

彼女らすべて(21)は左右の二手にカルトリ刀と頭蓋骨杯を持ち、歯をわずかにむき出し、三眼、一面を有する。裸で装飾を付け、首で作られた環を掛けることなく、赤褐色の燃えあがるような髪を解いて垂らし、死体の心臓の上の日輪に半伽の姿勢で踊る。

門衛たちはすべて展左の姿勢で、虎皮の衣をまとい、青色(ニー

ラ)である。

あるいは、スマーリニー等四人(215)は青黒(クリシュナ)であり、第二重の女神たち(613)は白、第三重の女神たち(1421)は緑で、門衛女たち(2225)は青黒(クリシュナ)である。

8 族主

世尊(ブツダカパーラ)は阿闍等の五仏(の小像、化仏)を付けている。チトラセーナーはマハーヴァイローチャナ(の化仏)を、スマーリニー等の四人はラトネーシャ(宝生)(の化仏)を、第二重の者たちは無量光(の化仏)を、第三重の者たちはヴァイローチャナ(の化仏)を、門衛女たちは不空(の化仏)を有する。

9 真言

世尊の心種子は「フーン」。心真言は「オーン ブツダカパーリニアーハ ヒー ハイ フーン ファト」である。この真言が一切業成就真言として用いられる。

第十三章注

(1) ブツダカパーラ・マンダラは『完成せるヨーガの環』(ZP)第

十章においても述べられている【立川 2007: 190-191】。NPY 第十三章のブツダカパーラ・マンダラは『ブツダカパーラ・タントラ』BT 第七章（デルゲ版, Nga, 157b, 4[58b, 6]）に述べられる【立川 2007: 191】。

(2) 「世尊二十五尊ブツダカパーラのマンダラにあつては」(bhagavato buddhakapalasya pañcaviṅśatyātmakasya maṇḍale) とテキストにある。つまり、二十五体よりなるブツダカパーラ尊により成立するマンダラと述べられているのであつて、ブツダカパーラ尊など二十五尊によって構成されるマンダラとは述べられていない。NPY 第十章にも「九体よりなるブツダカパーラ尊のマンダラにあつては」(bhagavato buddhakapalasya navātmakasya maṇḍale) とある。

(3) 演劇の「味」については【立川 1995: 25】【立川 2005: 127】参照。

(4) 五甘露とは牛乳、ヨーグルト、バター油、蜂蜜、砂糖である【山口 2005: 64】。ネワール密教では、水、牛乳、蜜、牛糞および草の一種の五点をいう場合がある（ガウタム・R・バジュラーチャールヤ氏による）。

(5) 「灯（明）」は五灯明すなわち五種の肉（人、象、犬、牛、馬）をいう【川崎 2006: 131】参照）。ガウタム・R・バジュラーチャールヤによれば、ネワール密教では、卵、鹿肉あるいは水牛の肝臓、魚、塩と油を混ぜたヨーグルト、肉を入れた米ビールを五灯明として用いることがある。

(6) ここでは Bh. 30, 14: nīla (青い) という語が用いられている。NPY において一般には淡い青を意味する nīla と濃い青あるいは青黒を意味することが多い kṛiṣṇa とが区別されているか否かははっきり

しない。注(7)参照。

(7) ここでも注(6)の場合と同様に Bh. 31, 4: nīla (青い) という語が用いられているが、このすぐ後に続くテキストには Bh. 31, 6: kṛiṣṇa とある。ここで「ニーラ」と「クリシュナ」がそれぞれ淡青と濃青というように意味が区別されているか否かは明らかではない。今日、ネワールの画家たちは、「ニーラ」を淡青、「クリシュナ」を濃青というように区別することが多いという。

第十四章 ヨーガームバラ・マンダラ⁽¹⁾

1 楼閣と中尊

ヨーガームバラ・マンダラにあつては、金剛籠の内部の風・火・水の輪の上に大洋等に囲まれた須弥山があり、その頂上にある二重蓮華の上に置かれた金剛の中央に建てられた楼閣があり、その奥部の中心に獅子がおり、その上に二重蓮華と「その上の」月輪がある。

〔その月輪の上に、体色は〕青黒の世尊ヨーガームバラ(1)が半伽の姿勢で坐る。青黒・白・赤の中央・右・左の三面を有し、それぞれの面は三眼を有し、六つの〔骨〕飾りを付ける。広い額には五つの頭蓋骨の環を付け、宝石、三日月および二重金剛が付された青黒い巻き髪に輝く五如来の〔化仏の付いた〕冠を被る。彼の背後には虎皮の腰巻きが垂れさがり、六臂を有し、金剛と金剛鈴を持つ

二臂によって、黄色の蛇に飾られた青黒あるいは白の〔妃〕ジュニヤーナ・ダーキニー⁽²⁾を抱く。〔残りの〕右二臂により〔妃の〕乳房と矢を、左二臂によって蓮華の器(頭蓋骨杯)と弓を持つ。

2 八方の女神たち

次に、東方には白いヴァジュラ・ダーキニー(2)が遊戯坐の姿勢で象王に乗る。

北方には蛇に飾られた黄色のゴーラ・ダーキニー(3)が半伽の姿勢で孔雀の上に乗る。

西方には赤いヴェーターリー(4)が屈折開脚(ウトクータカ)の姿勢でガルダ鳥に乗る。

南方には赤色の髪をほどこき、頭上で合掌したチャンダーリニー(5)が膝を地面に付け、召使いの上に坐す。

この場合、ジュニヤーナ・ダーキニー等の五尊⁽³⁾は、頭蓋骨杯とカトヴァーンガを右と左の二手で持つ。ヴァジュラ・ダーキニー等(2-5)は象などの上にある蓮華の上の日輪上におり、象皮の衣を着て、人皮を被っている。

北東には〔右半身〕白〔左半身〕黄のシンヒニー(6)が獅子の上で遊戯坐に坐る。二臂を有し、右手に振りあげた剣を、左手に索を持ちながら威嚇印を有する。

南東には〔右半身〕白〔左半身〕青のヴィヤーグリー(7)が金剛の両端にO型開脚の姿勢でいる。二臂を有し、右と左〔の手〕で鉤と索を持つ。

南西にはジャツカル面のジャムブキー(8)が水牛の上に半伽の姿勢でいる。〔右半身〕赤〔左半身〕青黒(クリシュナ)で、二臂で斧と索を持つ。

北西にはフクロウ面のウルキー(9)が狐の上で屈折開脚の姿勢でいる。〔右半身〕赤〔左半身〕黄で、二臂で棒と索を持つ。彼女らはそれぞれの乗物の上にある蓮華の上に置かれた日輪の上にいる。

東方にはヴァジュラ・ダーキニーの背後にダーキニー(10)がいる。白色で、両手を口に入れている。

北方にはゴーラ・ダーキニーの背後にディーピニー(11)がいる。黄色で、灯明を持ちながら頭上で合掌する。

西方にはヴェーターリーの背後にチューシニー(12)がいる。赤色で、血をすくった両手を口に近づけている。

南方にはチャンダーリニーの背後にカムボージー(13)がいる。青黒(クリシュナ)で、両手で杵を心臓にあてている。

これらの四女神は蓮華上の日輪の上にある死体に乗る。

3 第二重の女神たち

次に〔第一重の外側に〕金剛の環と光輪があり、その輪の外に環状の室があり、そ〔の室〕の中に〔二十の〕蓮華月輪〔蓮華の上の月輪〕があり、それらの上に〔次の二十女神がいる〕。

東方〔の蓮華月輪〕にはプッカシー(14)、ドラーマダー(15)、チャンダー(16)がおり、〔三人は〕甘露の入った容器を両手で持つ。

北方にはゴリー(17)、ルディラー(18)、マインシー(19)がおり、五灯(五種の肉)に満たされた蓮華の器(頭蓋骨杯)を持つ。

西方にはウグリー(20)、ジュヴァリター(21)、ビーバトサー(22)がおり、バリ供物(鬼神に捧げる生肉など)の器を捧げ持つ。

南方にはカパーリー(23)、ヴァジュリー(24)、クンティ(25)がおり、両手で飲物の器を持つ。

北東には誇らしげな仕草をするラーサー(26)と塗香の器を持つガンダー(27)がいる。

南東にはヴィナー(琵琶)を奏するヴィナー(28)と花を上方に投じているプシュパー(29)がいる。

南西には顔の前で立てた人指し指を動かしているギター(30)と香の器を持つドゥーパー(31)がいる。

北西には踊りながら水を両手ですくう仕草をするヌリトヤー(32)と両手を蕾の形にしながら灯明を持つデーパー(33)がいる。

これら〔ヨーガームバラの妃〕ジュニヤーナ・ダーキニー等の三十三尊は、二臂、三眼、一面で、髪を解き、頭に五つの頭蓋骨の環を付ける。しかし、ゴラ・ダーキニーは髪を逆立てている。

シンヒニー等(6-33)は赤い衣を着ている。

プッカシー等〔三人〕(14-16)と南東の隅の女神〔二人(28-29)の体色〕は白である。

ゴリー等〔三人〕(17-19)と北東の女神〔二人〕(26-27)は黄である。ウグリー等〔三人〕(20-22)と北西の女神〔二人〕(32-33)は赤である。カパーリー等〔三人〕(23-25)と南西の女神〔二人〕(30-31)は青である。

4 四門と四隅の神々

次に、金剛の環の円より外の場(プタ、重)、門および回廊(パツティカー)に〔八つの〕蓮華および〔その上の〕月輪がある。

それらの内、東方の門〔の蓮華の上の月輪〕に青黒のハリ(ヴィシュヌ)(34)、北方〔の門〕に黄色のブラフマー(35)、西方〔の門〕に白色のマヘーシュヴァラ(シヴァ)(36)が、南方〔の門〕

に赤色のカールツテイケヤ(クマーラ)(37)がいる。北東の隅には黄色のインドラ(38)が、南東には黄色のクベーラ(39)が、南西には青いヤマ(40)が、北西には白色のヴァルナ(41)がいる。

5 回廊の神々

神々の回廊には、東方にカランカ・バイラヴァ(42)、カトヴァー
ンガ・ラークシャサ(43)、ガネーシュヴァラ(44)、ガンターカル
ナ(45)がおり、白色である。

北方にチャンデーシュヴァラ(46)、チャンドデーヴァ(47)、
ジュヴァレーシュヴァラ(48)、ジャンカーラピーシヤナ(49)が
おり、黄色である。

西方にタツキルドラ(50)、スタンディレーシュヴァラ(51)、ダ
マルダムバラ(52)、ダツカーバヤーナカ(53)がおり、赤色であ
る。

南方にトゥムブレシュヴァラ(54)、スファアラナーダ(55)、
ダンシュトラーカーラ(56)、ダヌルダラ(57)がおり、青黒で
ある。

ハリ等のこれらの二十四尊(34)〜(57)は、四臂、三眼、一面
で、右の二臂でカトヴァーニングと三叉戟を持ち、左(の二)臂¹⁵で女

神を抱きながら頭蓋骨杯を持つ。そして、青い巻き髪を冠のように
結い、五つの頭蓋骨の環を付け、五つの飾りを付け、虎皮の衣を着
る。彼らの妃たちは、カトヴァーニングと頭蓋骨杯を右と左の手に持
つ。

6 族主

ここでは栄えあるヨーガームバラは阿闍等の五仏の化仏を付けて
いるが、ジュニヤーナ・ダーキニーは、阿闍あるいは大日の化仏を
付けている。ヴァジュラ・ダーキニー等四人(215)は、主尊
〔阿闍〕、宝生(ラトネーシヤ)、無量光、不空の化仏を付けてい
る。シンヒニー等四人(619)は阿闍、大日、宝生、無量光の化
仏を付けている。

ブラフマー(35)は大日〔の化仏〕を、マヘーシュヴァラ(36)
は無量光〔の化仏〕を、他の白い尊格(41)は大日〔の化仏〕を、
黄色の尊格(38、39)は宝生〔の化仏〕を、赤い尊格(37)は無量
寿〔の化仏〕を、青黒の(クリシュナ)尊格(34、40)は阿闍〔の
化仏〕を付けている。

7 真言

マンダラの主尊の心種子は「フーン」であり、心真言は「オーン

フーン ハハ スヴァーハー」である。「オーン グーン ガハ
スヴァーハー」がヴェーターリーの一切業成就の真言である。

8 附記

三重マンドラにおいては、中央(ガルバ)のマンドラは楼閣⁽¹⁷⁾の
たちを採り、ダーキニー等の四人(10)〜(13)は四門にいる、と
ある者はいう⁽¹⁷⁾。第二重も楼閣のかたちを採るといふ説もある⁽¹⁸⁾。「円
形の宝石でできた城である」とある者はいう。

第十四章注

- (一) ヨーゲームバラ・マンドラの基本テキストは『四座タントラ』
Śrīcaturpīṭhamahāyoginīkanta-rāja (『東北目録』四二八番)『北京
版大蔵経』六七番)である。このタントラに対する釈タントラとして
『東北目録』四二九番(『北京版大蔵経』六八番)および『東北目録』
四三〇番(『北京版大蔵経』六九番)がある。
GDK, No. 87はヨーゲームバラ・マンドラであるが、GDKに含め
られてゐるヨーゲームバラ・マンドラはNPY第十四章に述べられる
ものと異なる(本章注(5)参照)。
(二) NPY第四章はジュニヤーナ・ダーキニーのペンダラである。[立
川 2007: 195-194] [Raghu Vira and Lokesh Chandra 1995: 28-29]。
(三) Bh, 32, 14: *dākinyādayah* とあるが、Bh, 32, 脚注17には *jāna-*
dākinyādayah の読みがプロローダ写本 (B) にもあることが記されてい
る。C39b, 6-7; R40b, 1-2の読みと一致する。この二は、後者の読み

みに従う。この章ではこれまでに「ダーキニー」という名の尊格は登
場していない。テキスト訳は P (TTP, Vol. 80, p. 135, f. 5, l. 5: *ye*
shes kyī da ki ma) 44-45 P2 (TTP, Vol. 87, p. 58, f. 2, l. 8: *ye*
shes kyī mkha'i 'gro ma) と同じ「ジュニヤーナ・ダーキニー」とい
ふ。Lee, p. 41, l. 15参照。

(4) Bh, 32, 14: *pañcakapala-* は *pañca kapala-* とあるべきである。
つまり「ジュニヤーナ・ダーキニー等の五尊」であって「ジュ
ニヤーナ・ダーキニー等は五つの頭蓋骨」云々とは読むべきではな
い。この五尊とはヨーゲームバラの后としてのジュニヤーナ・ダーキ
ニーおよび四方に位置する女神たち (2-5) を指す。

(5) Bh, 32, 18: *gajātunde* とあるが、Bh, 32, 脚注18には *vajratunde*
の読みがアンブリマンシ写本 (C) (Bendall, No. 1279) にもあることが
記されている。なお E27a, 144-45 G29b, 8 は *vajratunde* とある。
この二は *vajratunde* と読む。テキスト訳 A (TTP, Vol. 80, p. 135, f.
5, l. 7) 44-45 P2 (TTP, Vol. 87, p. 58, f. 3, l. 2) と同じ「金剛」
(*rdo rje*) と読む。Lee, p. 42, l. 4参照。

(6) E27a, 6: *drāmada:* G30a, 5: *drāmāḥi*. [森 2001: 32] と *da*
mi da. Lee, p. 42, l. 16 は *drāmīd*. 今、Eに從う。Bh, 33, 7には
nandi とある。[Raghu Vira and Lokesh Chandra 1995: 52] 参照。

(7) Bh, 33, 7: *caṇḍa:* E27a, 6: G30a, 5: *caṇḍā*. E44-45に從う。

(8) Bh, 33, 8: *rudhira:* G30a, 5: *rudhira*. Uに從う。

(9) Bh, 33, 8: *māmsa:* G30a, 5: *māmsyah*. Uは女神名として
māmsi を導く。Lee, p. 42, l. 4参照。

(10) Bh, 33, 9: *jvalita:* E27b, 1; G30a, 6: *jvalitā*. E44-45に從う。

(11) Bh, 33, 9: *bhaṣa:* E27b, 1; G30a, 6: *bhaṣā*. E44-45に從う。

- (12) Bh, 33, 10: vajra: E27a, 2; G30a, 6: vajri. E ぎよひに從ふ。
 (13) Bh, 33, 10: kunia; E27a, 2; G30a, 6: kunyah. E ぎよひは女尊をこつて kunū を等ちいふるを問われぬ。
 (14) Bh, 33, 19: aghoryādayah: E27b, 6; G30b, 4: ghoryādayah. E ぎよひに從ふ。
 (15) Bh, 34, 13: khaivāṅgatriśūlabhrtsavyabhujāṅgīdevyah. Bh に從うならば「カトヴァーンガと三叉戟を持つ右臂によつて妃を抱き」となるが、「この読みでは左右の臂それぞれが何を有するかが明らかではない」。こゝではチベット訳に從ふ。P (TTP, Vol. 80, p. 136, f. 2, l. 8 - f. 3, l. 1): phyag g-yas pa gnyis kya kha iyaṅ ga rise gsum pa 'dzin pa'o/ g-yon pa gnyis kya kha mo la 'khyud pa dang thod pa 'dzin pa'o//; P2 (Vol. 87, p. 58, f. 5, ll. 5-6): g-yas pa'i phyag gnyis kya kha iyaṅ kha dang tri shu la 'dzin pa/ g-yon pa gnyis thod pa dang bcas pa ste lha mo la mkhyud pa/ P ぎよひ P2 の意味はぎよひに同くである。本誌 G31a, 3-4: -savyabhujāṅgīdevika kapala- とあり、左右の臂に何を持つかは語っていない。
 (16) 第一重が楼閣となったペンタタラにこゝでは GDK, No. 87 を参照。[Bsod nams rgya msho and M. Tachikawa 1989: 87] [Bsod nams rgya msho 1991: 152-154] [Raghu Vira and Lokesh Chandra 1995: 226] 参照。
 (17) Bh, 35, 3: dvārashtīāḥ; E28b, 4; G31b, 3: dvāresv ity anyāḥ. E ぎよひに從ふ。Lee, p. 44, l. 21 参照。
 (18) Bh, 35, 4: anyad dritiyapūṅam api kutāgārārupam; E28b, 5; G31b, 3: dviṭiyam api kutāgārārupam ity aparāḥ. E ぎよひに從ふ。Lee, p. 45, l. 1 参照。

第十五章 ヤマリー・マンダラ^①

1 楼閣と中尊

ヤマリー・マンダラにあつては、金剛籠の中に法源があり、その中にある楼閣の中には二重蓮華があり、その上の日輪の上には、骨で飾られた忿怒の相をした青黒い水牛がおり、その背の上に二重蓮華がある。

その〔二重蓮華の〕上の日輪に乗ったヤマを展左の姿勢で踏みつけた〔ヤマリー〕(1) がいる。彼〔の身色〕は青黒で、眉をつりあげ、髪を逆立て、金剛の飾りに飾られ、〔脚が〕短く、太鼓腹で、太っており、首から人の首の環をかけ、舌を出してふるわせ、光る牙で恐ろしい。中央・右・左の面はそれぞれ青黒、白、赤である。六臂で、カルトリ刀と頭蓋骨杯を持った二臂で自らの姿に似た智恵(妃)を抱き、右〔の残り〕の二手で金剛と剣を、左〔の残り〕の二手で円輪と蓮華を持ち、アナント等の竜(ナーガ)を飾りとしている^②。彼の姿は降三世に似ている。

2 四方の神々

彼〔ヤマリー〕の東には白い大日(2) がいる。右面は青く、左面は赤い。右の二手で円輪と剣を、左の二手で宝石と蓮華を持つ。

南には、黄色の宝生(3)がいる。「中央・右・左の」三面はそれぞれ黄、青黒、白である。右の二手で宝石と剣を、左の二手で円輪と蓮華を持つ。

西には赤い無量光(4)がいる。「中央・右・左の」三面はそれぞれ赤・青黒・白である。右の二手で蓮華と剣を、左の二手で宝石と円輪を持つ。

北には黒緑のイールシャー・ヤマーリ(5)がいる。「中央・右・左の」三面はそれぞれ黒緑・青黒・白である。右の二手は刀と円輪を、左の二手は宝珠と蓮華を持つ。

四人とも族主の特徴を持ちながら、忿怒形であり、カルトリ刀と頭蓋骨杯を持つ主たる左右一組の臂によつて自らに似た妃を抱いている。

3 四維の女神たち

南東の隅に白色のヴァジュラ・チャルチカー(6)がいる。モーハ・ヤマーリと同じ身色と持物を有する。

南西の隅に恐ろしい顔をしたヴァジュラヴァーラーヒー(7)がいる。ドウヴェーシヤ・ヤマーリに似る。

北西の隅にヴァジュラ・サラスヴァティー(8)がいる。ラーガカーラーリに似る。

北東にはガウリー(9)がいる。イールシャー・ヤマーリ(5)に似る。

この場合、大日等(2-5)は二重金剛の四方の輻にいて、四維の輻にはチャルチカー等(6-9)がそれぞれの方「夫」を伴っている。

4 四門の神々

東門にはムドガラ・ヤマーリ(10)がいる。「身色は」青黒で、「中央・右・左の」三面は青黒・白・赤である。右の二臂は金剛の付いた杵(ムドガラ)を、右の二臂は宝珠と蓮華を持つ。

南(門)にはダンダ・ヤマーリ(11)がいる。「身色は」白色で、「中央・右・左の」三面は白・青(ニーラ)・赤である。右の二臂は棍棒と刀を、左の二臂は蓮華と円輪を持つ。

西(門)にはパドマ・ヤマーリ(12)がいる。ラーガ・ヤマーリに似る。

北(門)にはカドガ・ヤマーリ(13)がいる。イールシャー・ヤマーリに似る。淡い青色(ニーラ)である。

5 神々の姿

すべての「神々」は恐ろしい蛇を飾りとして、高笑いをしつつ、

赤褐色の逆立った髪を輝かせ、口は牙で恐ろしく、カルトリ刀と頭蓋骨杯を持ち、主要な二臂によって自身に似た智慧(妃)を抱いている。

ここでは大日および妃たちは二重蓮華の上の月輪の上にいる⁽⁵⁾。他の神々は二重蓮華の上の日輪の上にいる。マンダラの東南等の四維においては、二重蓮華の上に置かれた四つの「蓮華の容器」(頭蓋骨杯)があり、それぞれは精液、経血、五甘露、五灯明(五種の肉)によって満たされている。

6 族主

クリシュナ・ヤマリーの族主は頭上の「化仏としてある」阿闍である⁽⁶⁾。大日等の四仏の「族主」でもある。彼ら「四仏」はそれぞれローチャナー等とムドガラ・ヤマリー等の族主である。

7 真言

世尊(ヤマリー)の種子真言は「ヤン」であり、「オーンフリーヒ シュトリーヒ ヴィクリターナナ(醜い顔の者よ) フーンフーン ファト ファト スヴァーハー」というのが心真言であるとともに一切業成就真言でもある。

第十五章注

(1) 「ヤマリー」(ヤマ・アリ)とは「ヤマ」(閻魔)の「アリ」(敵)、すなわち、死者たちの王ヤマを打ち負かす者を意味する。水牛はヤマの乗り物であるが、ヤマリーも水牛を乗り物とする。

GDKには四種のヤマリー・マンダラ (Nos. 50-53) が収められているが、NPY第十五章のヤマリー・マンダラはGDK, No. 52 (ラ翻訳官流のもの)のマンダラに近い。ヴィルーパー流のNo. 50は五尊マンダラであり、シュリーダラ流のNo. 51には四維の頭蓋骨杯が見られない。ラ翻訳官流のNo. 53のマンダラは「二一尊より成り、中尊は六面である。」

GDK, No. 52のヤマリー・マンダラの基本タントラは「一切如来身口意黒ヤマリー・タントラ」(『東北目録』四六七番、『北京版大蔵経』一〇三巻) *びあせ* [bSod namu raya miṣho 1991: 96]。

(2) Bh, 24, 6-9; [森 1996: 102] 参照。

(3) Bh, 36, 18: *cinhaiḥ*; E29b, 1; G32a, 6: *cinhaiḥ*. EおよびGに従う。

(4) Bh, 36, 19; Lee, p. 46, l. 5: *ghoṇa*; Bh, 36 脚注19: *ghora*. 二つでは後者の読みに従う。

(5) Bh, 37, 9: *suryaśāhā*; E29b, 6; G32b, 4: *candraśāhā*. EおよびGに従う。Lee, p. 46, l. 18 参照。

(6) Bh, 37, 12: *kuleśas tu mūrḍhani kiṣṇayamare* [r *akṣobhyahā*] *vairocanaścaitumām api* は「クリシュナ・ヤマリーの族主は頭の上の(化仏としてある)阿闍である。大日等の四仏の「族主」も同様である」と読むことができる。今、この読みに従う。しかし「阿闍であ

る」という部分は編者バッタチャルヤが自ら補った部分であった。Lee, p. 47, l. 2: *kuleśas tu mūrḍhni kṛṣṇayamarāḥ syād aksobhyaḥ* は Bh と同様に同じ意味である。Lee, p. 47, note 1100 には「阿闍びである」という語を N4 (WGS-20, Institute for Advanced Studies of World Religions, われわれの聲やどほ) とあると記されているが、T34b, 4 行 *ś kuleśas tu mūrḍhni kṛṣṇayamarāḥ syād ātmavairocanaḍcaurām api* とあり「族主は阿闍である」と述べられているわけではならぬ。一般に族主という場合には五仏のいずれかをいうのであり、Bh および Lee に見るように阿闍がヤマリーの族主であるとは考えられない。むしろヤマリー・ペンダラにおけるヤマリーと阿闍とはほぼ同一視されている。

チベット語 (TTP, Vol. 80, p. 137, f. 1, l. 3-4: *gshin rje gshed nag po'i rigs kyi bdag po ni sbyi bor mi bskvod pa'i bdag nyid do// man par snang mdzad la sogs pa bzhi yang de bshin no//*) は「クリシュナ・ヤマリーの族主は頭上(化仏として)ある阿闍その者である。大日等の四仏も同様である」とあり、Bh および Lee と同じ意味である。

P2 (TTP, Vol. 87, p. 59, f. 3, l. 8-f. 4, l. 1: *bcom ldan 'das rigs kyi bdag po ni gshin rje gshed nyid do// man par snang mdzad la sogs pa bzhi yang de bzhin no//*) には「世尊の族の主はヤマリーである。大日等も同様である」とある。ここではヤマリーが族主であって、阿闍が族主であると述べられてはいない。

P2 におけるようにヤマリーが族主であると述べるサンスクリット写本もある。E30a, 1; G32b, 6: *kuleśas tu mūrḍhni kṛṣṇayamarāḥ syād ātmamo vairocanaḍcaurām api/* には「族主は自身の頭上

にあるクリシュナ・ヤマリーとならう。大日等の四仏の場合も同様である」とある。「自身(の) (ātmano) とはヤマリー自身の意味にとちかざるを得ない。しかし、ヤマリーの頭上にヤマリーの化仏が置かれるとは少なくとも一般的ではない。

C45b, 3: *kuleśas tu mūrḍhni kṛṣṇayamarā/ syād ātmavairocanaḍcaurām api* (族主は頭上のクリシュナ・ヤマリーであり、(ヤマリー) 自身である大日等の四仏の(族主)でもある) は、T と同内容である。しかし、「自身である」(ātma-) の意味は明確ではない。おそらくは「元来は *kṛṣṇayamarāḥ aksobhyaḥ* とあったものが *kṛṣṇayamarāḥ syād ātma* と誤写されたものと考えられる。

以上のごとく、Bh, Lee および P におけるように「ヤマリーの族主は阿闍である」と読むべきである。

チベット仏教ゲルク派の僧チャンキヤの注(『北京版大蔵経』六二三六番)には「五如来にとつて阿闍が主であるように、東と南東にいる二尊にあつては大日の、南と南西の二尊にあつては宝生の、西と北西の二尊にあつては無量光(阿弥陀)の、北と北東の二尊にあつては不空成就の化仏が付く」(TTP, Vol. 162, p. 86, f. 3, ll. 7-8)。このようなチャンキヤの理解では、このヤマリー・ペンダラの大日等の四仏の頭上には阿闍の化仏があると考えられているのであろう。

第十六章 ヴァジュラターラー・マンダラ¹⁾

1 楼閣と中尊

ヴァジュラターラー・マンダラにあつては、金剛籠の内部の法源

の中にある楼閣の中心部に八弁の二重蓮華があり、その芯の上の月輪に金色の女神ヴァジュラターラー(金剛多羅)(1)がいる。五仏(の化仏)の冠を被り、金・白・青(ニール)・赤の中央・右・左・後の四面を有する。八臂で、右(の四手)に金剛、索、矢、ホラ貝を持ち、左(の四手)に黄睡蓮、弓、鉤、威嚇印を有する。

2 八方の花弁

東方の花弁には白いプシュパ・ターラー(華多羅)(2)がいる。両手で花の入った壺を持つ。

南方の花弁には青黒いドゥーパ・ターラー(香多羅)(3)がいる。両手で香炉を持つ。

西方の花弁には黄色のディーパ・ターラー(灯多羅)(4)がいる。細長い灯台を両手で持つ。

北方の花弁には赤いガンダ・ターラー(塗香多羅)(5)がいる。両手で香水の入ったホラ貝を高く掲げている。

これらの四女神たちは月輪の上に乗っている。南東等の花弁には(それぞれ)ヴァイローチャナ等と同じ色を有する円輪、金剛、蓮華、剣がある。

3 第二重の神々

第二重では、東門に白いヴァジュラ・アंकシー(金剛鉤女)(6)がおり、右手に鉤を持つ。

南門に黄色のヴァジュラ・パーシー(金剛索女)(7)がおり、蕾のような右手で索を持つ。

西門に赤いヴァジュラ・スポーター(金剛鍊女)(8)がおり、右手に金剛鍊(金剛が両端についた鍊)を持つ。

北門に緑のヴァジュラ・ガンター(金剛鈴女)(9)がおり、右手に金剛鈴(柄の先端に金剛の付いた鈴)を持つ。

南東等の隅にある二重蓮華にはローチャナー、「マーマキ、パングラー、ターラー」による清浄性(のシンボル)として菩提心(精液)の入った瓶、須弥山(メール山)、「護摩のための」炬、大旗がある。

上方には白いウシュニーシャヴィジャヤー(尊勝仏頂)(10)がおり、右手に円輪を持つ。

下方には青いスムバー(11)がいる。右手に蛇の索を持つ。

この六女神たち(6-11)は左手の人指し指を延ばして威嚇する仕草(威嚇印)をしながら、二重蓮華の上の日輪にいる。十女神とも(2-11)二臂、一面を有する。十一女神(1-11)とも結伽趺坐に坐り、金色の耳飾りを揺らせながら、きらびやかな衣や装飾を

まとい、蓮華のように赤い光背を有する。

4 族主

ヴァジュラターラーの族主は宝生如来である。

プシュパ・ターラー等(2-5)の「族主」は、大日、阿闍、阿弥陀、不空如来である。

ヴァジュラ・アंकシー等(6-9)の「族主」も同様である。

ウシュニーシャー(10)の「族主」は宝生如来である。

スムバー(11)の「族主」は不空如来である。

女神「ヴァジュラターラー」の種子真言は「ターム」。心真言は「オーム ターレー トゥ ターレー トゥレー スヴァーハー」。

これは一切業真言でもある。

第十六章注

(1) このヴァジュラターラー・マンダラと同種のマンダラが、『観想法の花環』*Sadhanamala* (SM), No. 97にある ([Bhattacharya 1968: 194-200])。[本川 1986: 65-97] [Raghu Vira and Lokesh Chandra 1995: 56-57] 参照。

(2) Bh, 38, 17: bodhicitan ghato: E30b, 3; G33b, 2: bodhicitta-ghato. E およびひびに從う。

(3) Bh, 38, 21: dvadasapi: E31b, 5; G33b, 4: ekadasapi. E および

Gに從う。Lee, p. 48, l. 9 参照。

第十七章 マーリーチー・マンダラ⁽¹⁾

1 楼閣と中尊

マーリーチー(摩利支天)・マンダラにあつては、金剛籠の内にある法源の中に楼閣がある。ある者は「その〔金剛籠〕に法源はなく、須弥山の上に楼閣がある」という。楼閣の中央に存する仏塔の内部の洞に二重蓮華があり、その上の月輪あるいは日輪の上に展左の姿勢で女神マーリーチー(1)が立つ。黄色で、きらびやかな寶石の冠を被り、髪には仏塔の飾りが付けられ、きらびやかな寶石と装飾によつて飾られ、三面を有する。中央面は黄、右は白、左は青黒でそれぞれ野猪の面である。怒つて眉をつり上げ、流し目をして、出した舌を動かし、恐ろしい形相である。

六臂で、右手には矢、金剛、針を持ち、左手には弓、糸、花を付けたアショカ樹の蕾を持つ。青い(ニーラ)衣をまとい、きらびやかな青い(ニーラ)被りものを被り、金色の豚に乗り、金色の野猪を思い起こさせるアショカ樹の花房で作った頭飾りを付けている。

2 第一重の神々

東方にはバンドウーカ樹の花の色〔すなわち白^②〕をしたアルカマシ(2)がいる。右と左の手に糸と針を持つ。

南方には金色のインドウマシ(3)がいる。右手に糸を通した針を持ち、左手にアショーカ樹の蕾を持つ。

西方には黄色のアンタルダーナマシ(4)がいる。右手にアショーカ樹の芽を持ち、左手に威嚇印を結びながら索を持つ。

北方には赤いテージョーマシ(5)がいる。右と左の手に矢と弓を持つ。

南東等にはウダヤマシ(6)、グルママシ(7)、ヴァナマシ(8)、チーヴァアラマシ(9)がおり、それぞれアルカマシ等と同じ色と持物を有する。

3 第二重の神々

第二重において、東方にはマハーチーヴァアラマシ(10)とヴァラーハムキー(11)がいる。〔両者とも〕青黒で、牙をむいて恐ろしく、右手に金剛鉤を、左手に金剛索を持つ。

南方にはバダークラムシ(12)とヴァラーリー(13)とがいる。〔両者とも〕黄色で、右手にアショーカ樹の蕾を、左手に金剛を持つ。

西方にはパラークラムシ^③(14)とヴァダーリー(15)とがいる。〔両者とも〕赤で、左右の手に弓と矢を持つ。

北方にはウールママシ^④(16)とヴァラーリー^⑤(17)とがいる。〔両者とも〕緑で、左右の手に糸と針を持つ。

東南の隅には赤いヴァッターリ^⑥(18)がいる。左右の手に糸と針を持つ。

南西の隅には黄色のヴァダーリ^⑦(19)がいる。右手に糸を通した針を持ち、左手に蕾の残るアショーカ樹の花房を持つ。

西北の隅には白い身体のヴァラーリ^⑧(20)がいる。右と左の手にアショーカ樹の蕾と索を持つ。

北東の隅には赤いヴァラーハムキー(21)がいる。両手で弓と矢を持つ。

東方等の門にはアロー(22)、ターロー(23)、カーロー(24)、マツアロー^⑨(25)がいる。順次、白、黄、赤、緑であり、金剛鉤、索、鑊、鈴(アーヴェーシヤ)を両手で持つ。

4 女神たちの姿

これらアルカマシ等の二十四女神(2-25)は初々しくはじけるばかりの若さを保ち、頭には仏塔を飾り、きらびやかな寶石の飾りを付け、きらびやかな青い(ニール)上衣を着て、三眼、野猪の一

面を有し、二臂で、金色の野猪に乗っている。

金色の野猪の群に囲まれた門衛女たち (22-25) は二重蓮華の上の日輪の上に展右の姿勢で立つ。

他の二十女神 (2-21) は二重蓮華の上の月輪の上に展左の姿勢で立つ。

5 族主

マリーチーの族主は主尊「大日」である。東方等の四方に位置する者たちの族主は、阿闍、宝生、無量光、不空成就である。南東等の四維に位置する者たちの「族主」は「頭上に」仏塔を有する。

別の者は「白色の者たちの族主は大日、青黒の者たちの「族主」は阿闍、黄色の者たちの族主は宝生、赤色の者たちの族主は阿弥陀、緑色の者たちの族主は不空成就である」という。

第十七章注

- (1) 太陽の神格化であるマリーチーのマンダラについては [Raghu Vira and Lokesh Chandra 1995: 58-59] 参照。
 (2) [Majumura 2009: 275]。
 (3) Bh, 40, 19: parakramamasir: E31b, 5; G34b, 4: parakramasir: EおよびGに従う。

(4) Bh, 40, 21: uragamasi: E31b, 5; G34b, 1-2: ūramasi: EおよびGに従う。 [森 2001: 271] ㄷㄱ ūramasi ㄷㄱㄴ。

(5) Bh, 40, 21: varāhi: E31b, 5; G34b, 5: varāhi: EおよびGに従う。 [森 2001: 271] ㄷㄱ varāhi ㄷㄱㄴ。

(6) Bh, 40, 22: vartāli: E31b, 6; G34b, 5: vartāli: EおよびGに従う。 [森 2001: 271] ㄷㄱ vartāli ㄷㄱㄴ。

(7) Bh, 40, 23: vadali: E31b, 6; 34a, 6: vadaliḥ. EおよびGに従う。 [森 2001: 271] ㄷㄱ vadali ㄷㄱㄴ。

(8) Bh, 41, 1: varāhi: E32a, 1: varāhi: G34b, 6: varāhiḥ. Eに従う。尊名を varāhi ㄷㄱㄴ。 [森 2001: 271] ㄷㄱ varāhi ㄷㄱㄴ。

(9) Bh, 41, 3: E32a, 2; G35a, 1: matsalo. ㄷㄱㄴ d (TTP, vol. 80, p. 137, f. 4, l. 7) ㄷㄱ sat tsa lo sam ba mu ddha ㄷㄱㄴであるが、これは Bh, 41, 3: matsaro saavyam ūrthvādho と同じ部分が女尊の名称と読まれたものと考えられる。P2 (TTP, Vol. 87, p. 60, f. 2, ll. 7-8: pat tsha lo dang/ san̄i bha mur dha iō nams ni) の場合も d と同様を考えることができる。

第十八章 五護陀羅尼マンダラ^①

1 楼閣と中尊

五護陀羅尼マンダラにあつては、金剛籠の中に須弥山があり、その上に楼閣があり、その中の二重金剛の中心に二重蓮華があり、その上の月輪にマハープラティサラ (一) がある。黄色がかつた赤い光の円輪を有し、四面を有する。中央の面は黄色、右面は白色、

後面は青黒、左面は赤色である。右の〔六〕臂には宝石、円輪、金剛、矢、剣および与願印を有し、左の〔六〕臂には金剛、索、三叉戟、弓、斧およびホラ貝を持つ、というように十二臂を有する。仏塔を頭に飾り、結跏趺坐に坐る。

2 四方の女神たち

彼女の東方にはマハーサーハスラプラマルディニー(2)がいる。二重蓮華の上の月輪の上に遊戯坐に坐り、「身体は」白で、月光の光背を有する。四面を有し、中央面は白、右は青黒、後は黄、左は緑である。右の〔五〕手に蓮華の上に置かれた八輻輪、願いかなえる仕草(与願印)、鉤、矢、剣を有し、左の〔五〕手に金剛、人指し指を延ばして威嚇する仕草、索、弓、斧を有する、というように十臂である。

南方にはマハーマントラヌサーリニー(3)がいる。二重蓮華の上の日輪の上におり、日の光を放つ。結跏趺坐に坐り、「身体は」青黒で、青黒・白・赤の中央・右・左の〔三〕面を有する。十臂で、一組の両手で転法輪印を示し、もう一組で禅定印を有する。他の右手で金剛、矢、与願印、「おそれるな」という仕草(施無畏印)を有し、左手で索を持ちながら人指し指を延ばして威嚇する仕草、弓、ひとかたまりの寶石、蓮華の入った瓶を有する。

西方にはマハーシータヴァティ(4)がいる。二重蓮華の上の日輪の上に半伽の姿勢で坐り、日の光を放つ。「身体は」赤で、赤・白・青黒の中央・右・左の〔三〕面を有する。八臂で、右の〔四〕手に蓮華を持ちながらの施無畏印、矢、金剛、剣を持ち、左の〔四〕手に索を持ちながら人指し指を延ばして威嚇する仕草、弓、宝石の付いた旗、心臓(の場所)にあてられた経函を持つ。

北方にはマハーマユリー(5)がいる。二重蓮華の上の月輪に薩埵坐に坐り、月の光を放つ。「身体は」緑で、緑・青黒・白の中央・右・左の〔三〕面を有する。八臂で、右の〔四〕手に孔雀の尾、矢、与願印、剣を持ち、左の〔四〕手に器の中の比丘、弓、膝の上に置かれて宝石をあふれさせた壺、二重金剛と宝石の付いた旗を持つ。

3 第二重の女神たち

第二重において、東南の隅には青黒いカーリー(6)がいる。両手でホラ貝を持つ。

南西の隅には黄色のカラートリ(7)がいる。両手で金剛の付いた旗を持つ。

西北の隅には赤いカラカンティ(8)がいる。両手で斧を持つ。

北東の隅には白いマハーヤシャール(9)がいる。両手で三叉戟を持つ。

これらの四女神は二臂、一面を有する。

4 女神の姿

九女神はすべてきらびやかな宝石、装飾、衣を有し、宝冠を被り、それぞれの面は三眼である。

5 族主

〔九女神は〕それぞれ宝生、大日、阿闍、阿弥陀、不空、阿闍、宝生、阿弥陀、大日如来の化仏を付けている。

6 四門の女神たち

東等の門には二重蓮華の上の日輪の上にヴァジュラ・アーンクシー(10)、ヴァジュラ・パーシー(11)、ヴァジュラ・スポーター(12)、ヴァジュラ・アーヴェーシー(13)がいる。以前〔例えば、第三章〕と同様である。

7 真言

マハープラティサラ等の種子〔真言〕は「オーン」である。

「オーン マニダリ(宝を持つ者よ) ヴァジュリニ(金剛を持つ者よ) マハープラティサレー フーン フーン ファト ファト スヴァーハー」というのが心〔真言〕である。

〔マハーサーハスラプラマルディニーの〕種子〔真言〕は「ブーン」であり、「オーン アーハ マハーサーハスラプラマルディニブーン フーン」というのが心〔真言〕である。

〔マハーマントラヌサーリニーの〕種子〔真言〕は「フーン」であり、「オーン アーハ マハーマントラヌサーリニ フーン フーン」というのが心〔真言〕である。

〔マハーシタータヴァティの〕種子〔真言〕は「ジーン」であり、「オーン アーハ マハーシタータヴァティ ジーン フーン」というのが心〔真言〕である。

〔マハーマーユリーの〕種子〔真言〕は「マン」⁽²⁾であり、「オーン マハーマーユリー ヴィドヤラージュニ フーン フーン ファト ファト スヴァーハー」というのが心〔真言〕である。

目的に合わせて彼女たちの内で異なった女神が主尊となる。その場合、族主の真言が一切業成就真言である。

第十八章注

(1) 五護陀羅尼(パンチャ・ラクシャール)とは、五人の女神のグルー

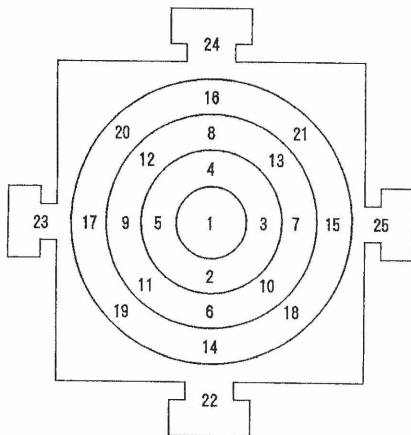
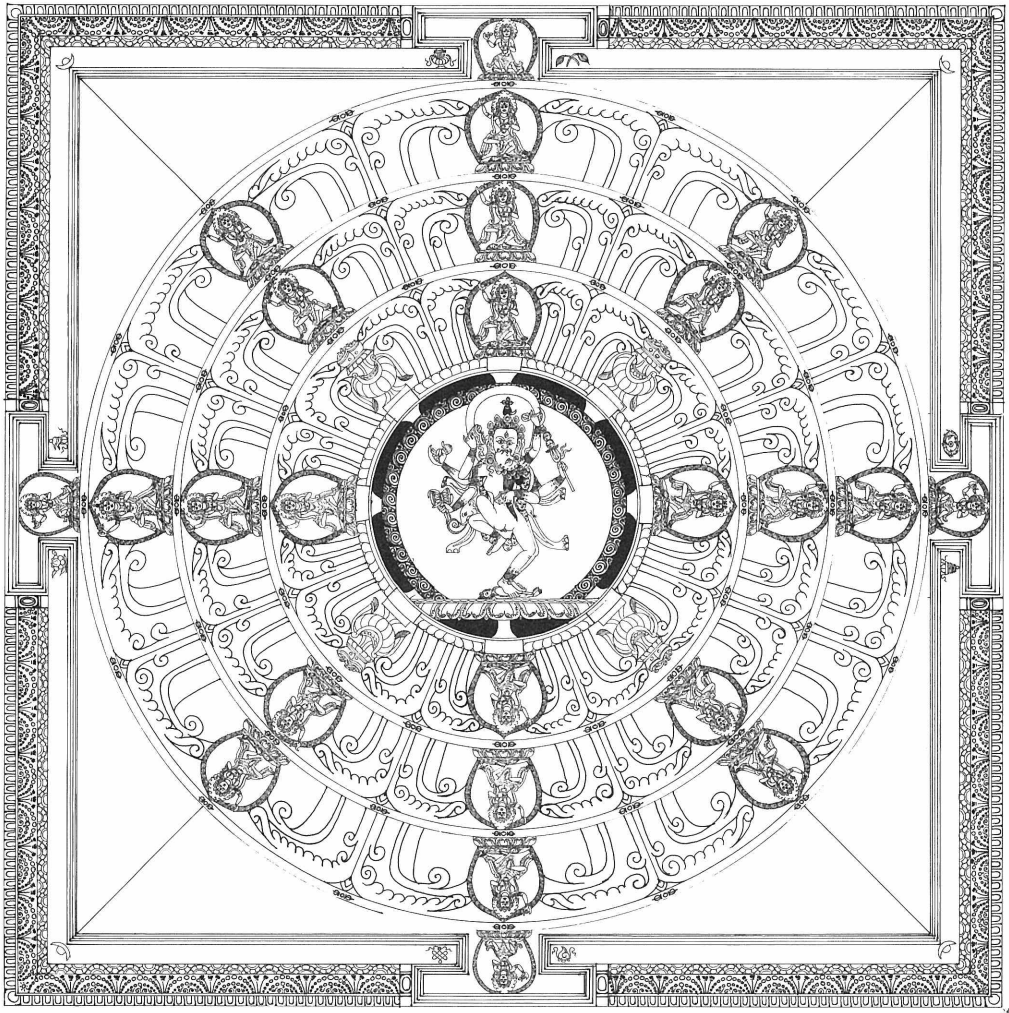
プをいう。その五人とはマハープラティサラー(1)(大随求明妃)、マハーサーハスラプラマルディニー(2)(大千摧碎明妃)、マハーマントラーヌサリリニー(3)(密呪随持明妃)およびマハーシータヴァティー(4)(大寒林明妃)、マハーマユーリー(5)(大孔雀明妃)である。「ラクシャー」とは守るための手段つまり呪文・陀羅尼を意味する。かの五つの陀羅尼のほとんどが七、八世紀までには神格化され、一つのグループとして尊崇されたのは更に後のことと推定されている。

NPY 第十八章の五護陀羅尼マンダラに関しては [Raghu Vira and Lokesh Chandra 1995: 60-61] 参照。GDK, No. 5 [bSod nams rgya msho 1991: 6-7] は五十六尊より成る五護陀羅尼マンダラである。

この五十六尊は、五護陀羅尼、十方夫、九曜、二十八宿および四天王である。GDK, No. 5 の五護陀羅尼マンダラの基本テキストは『東北目録』五六一番(『北京版大藏経』一七九番)である。

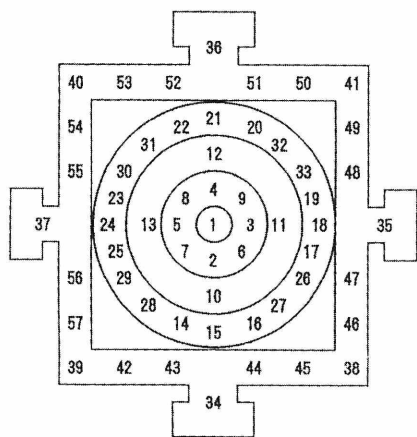
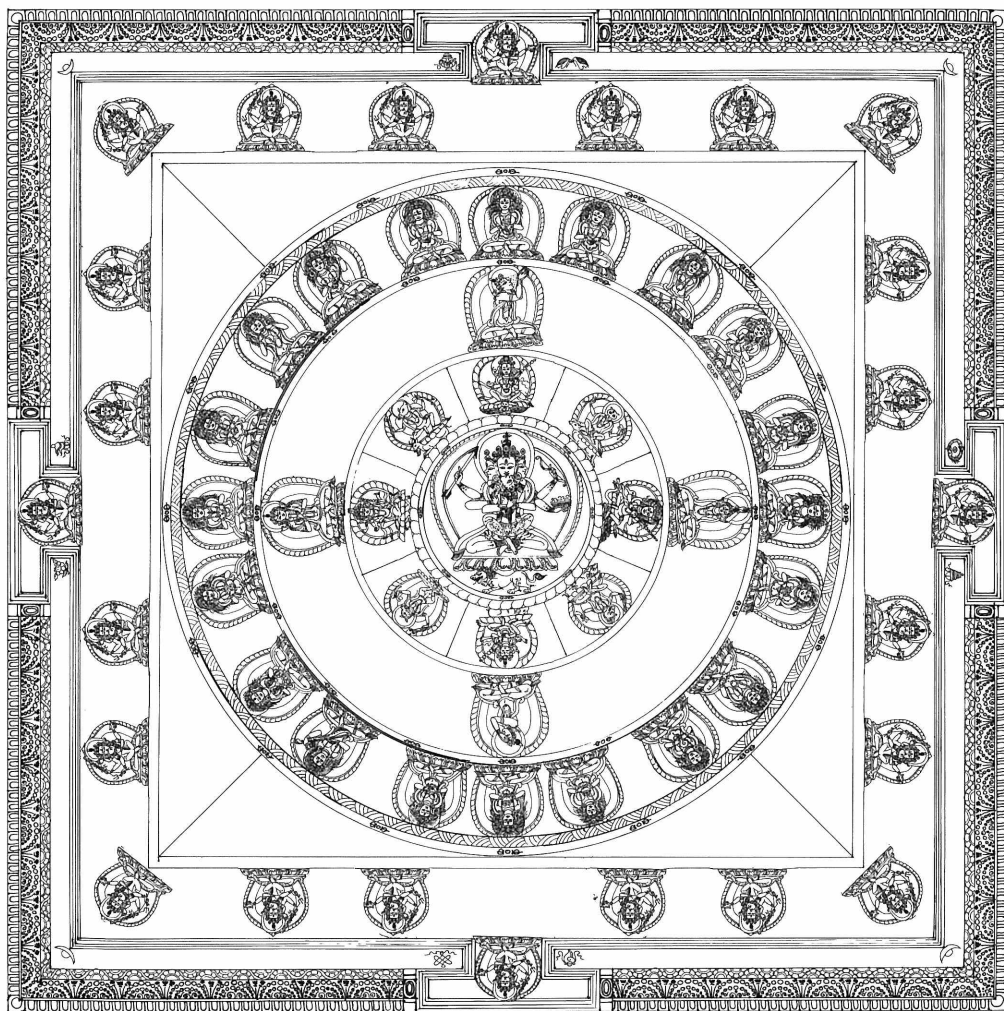
マハーマユーリー陀羅尼の和訳は [岩本 1975: 211-269] を、マハーサーハスラプラマルダニー陀羅尼(守護大千国土経)の和訳は [岩本 1975: 271-350] 参照。

(2) Bh, 43, 10; bñam lnamj; C50a, 6; R51b, 2; bñam jim; E36b, 4; G33b, 4; bñam nam. Lee, p. 53, l. 2 等 MAM の読みを採用する。この読みは E・G および Lee に従う。

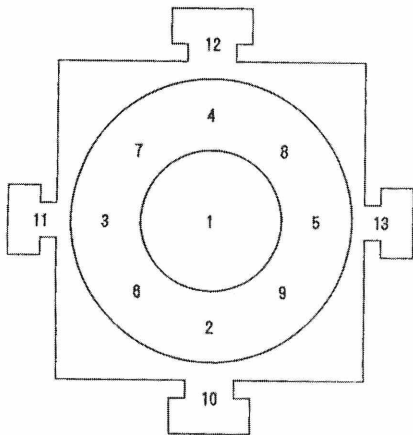
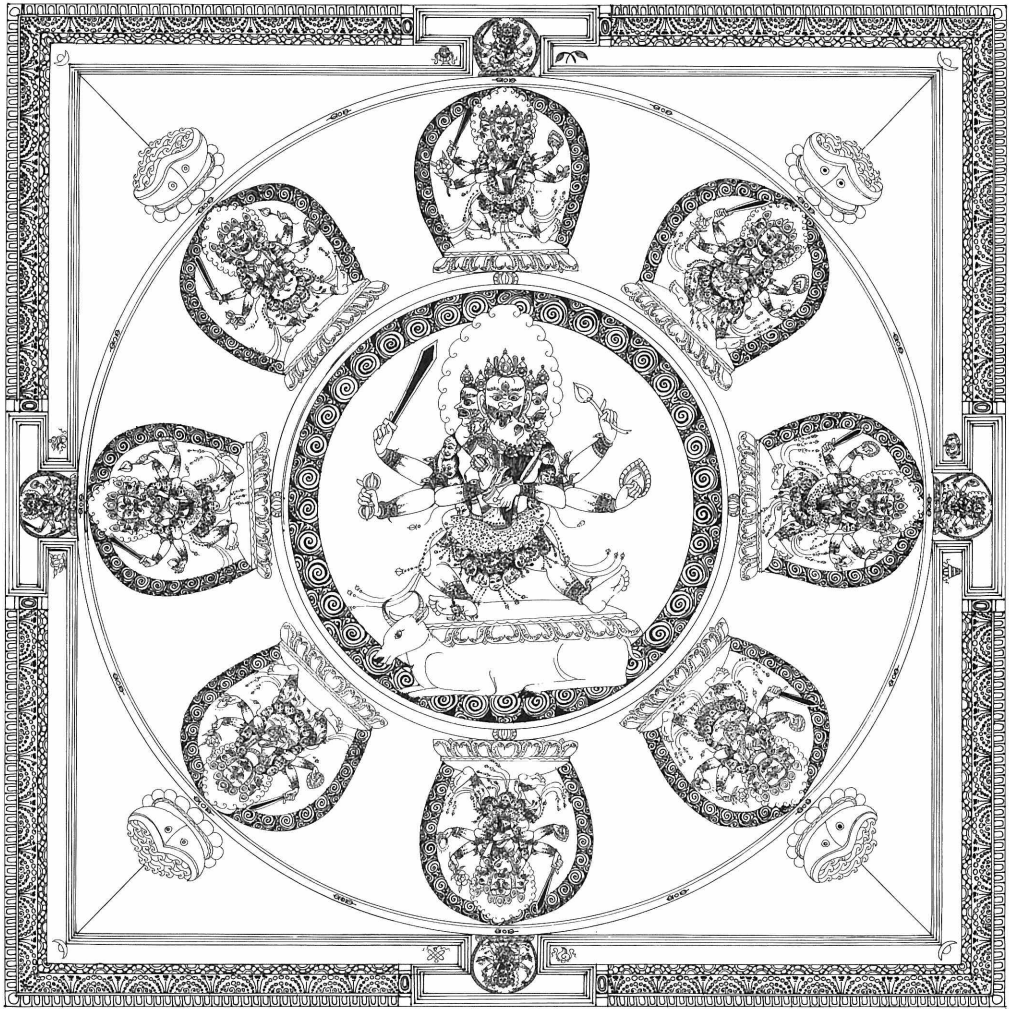


第十三章 ブッダカパーラ・マンダラ

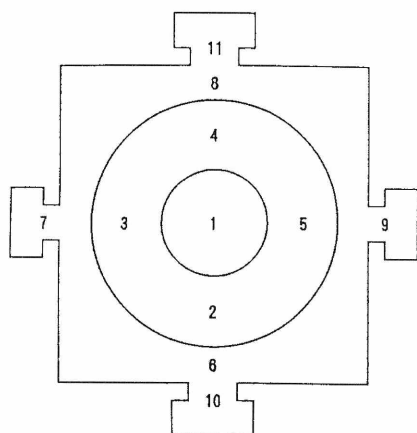
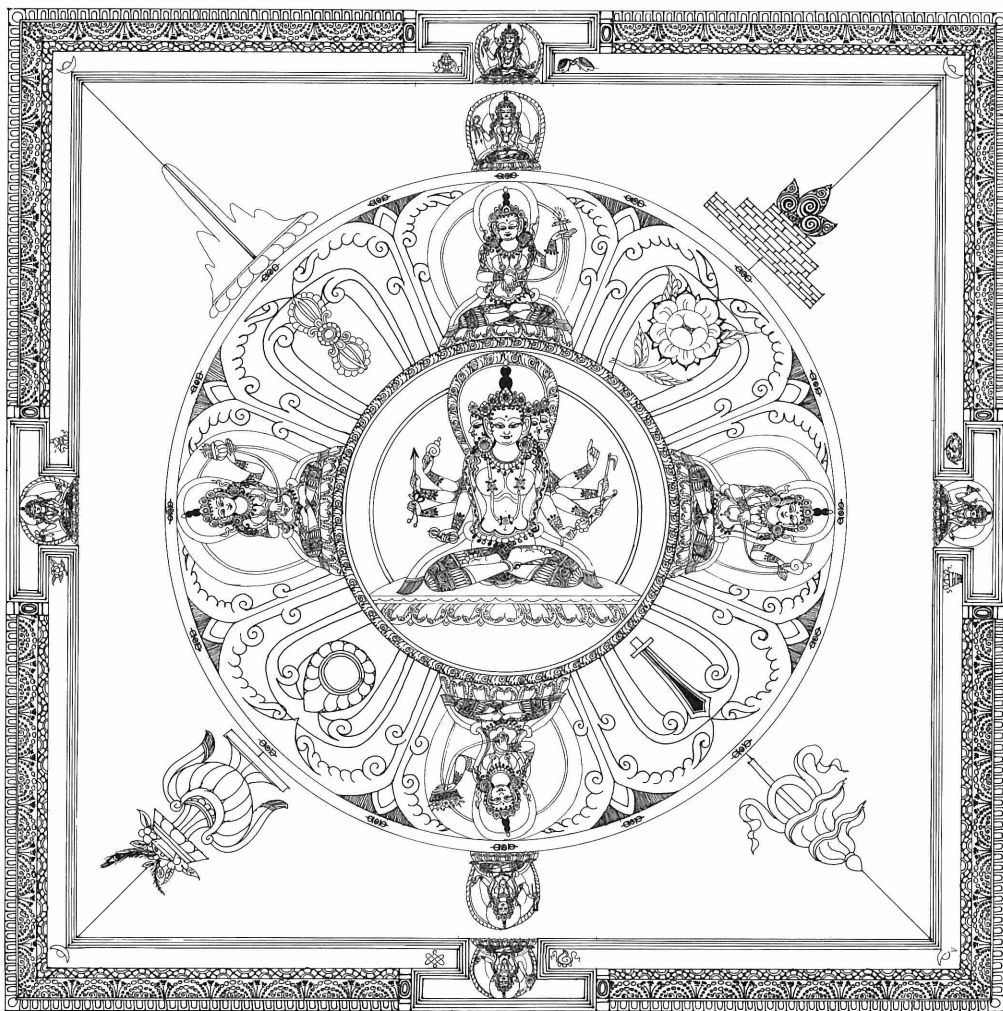
(以下、第十八章までのマンダラ図は Gautam R. Vajracarya によって *Niṣpannayogāvalī* に基づいて描かれたものである。[Tachikawa and Ito 2006: 238-269] 参照)



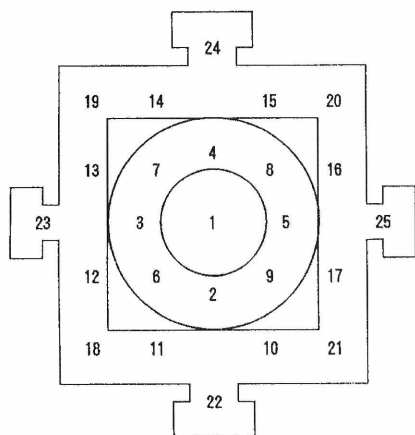
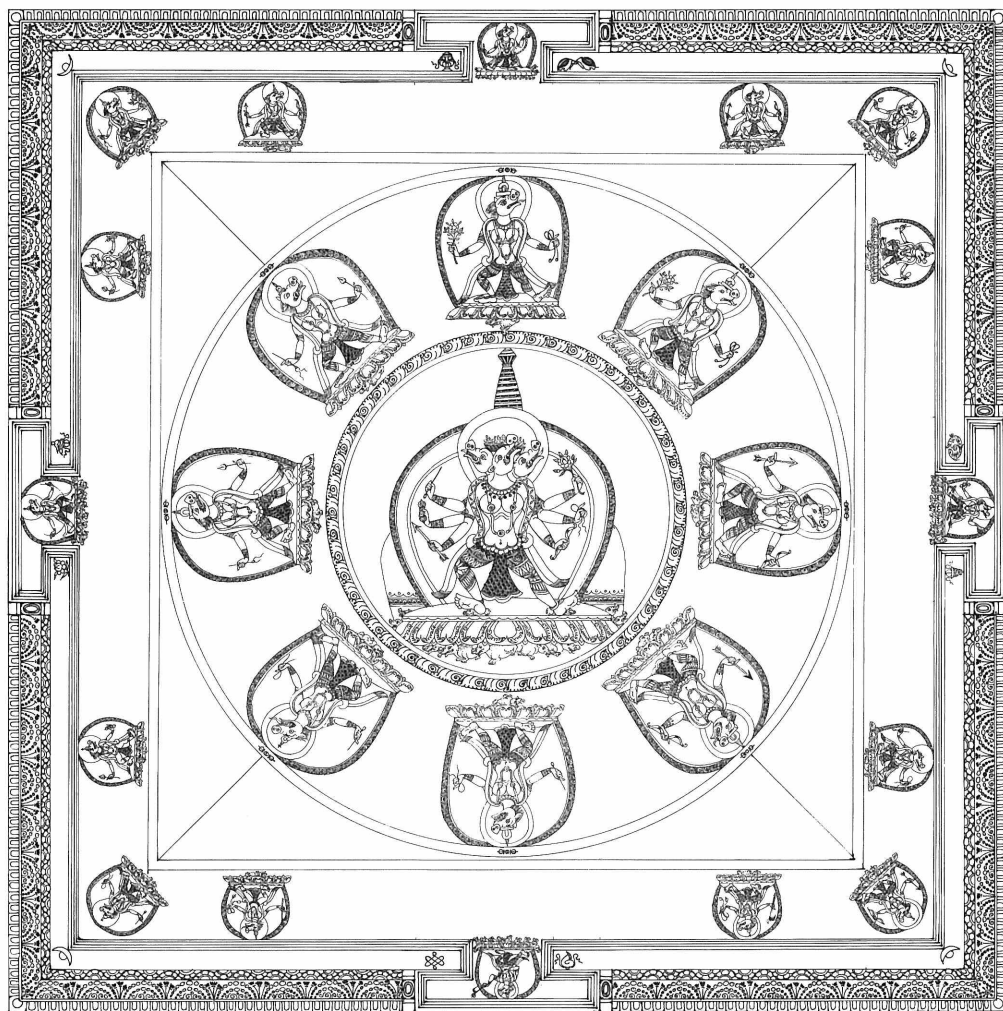
第十四章 ヨーガームバラ・マンダラ



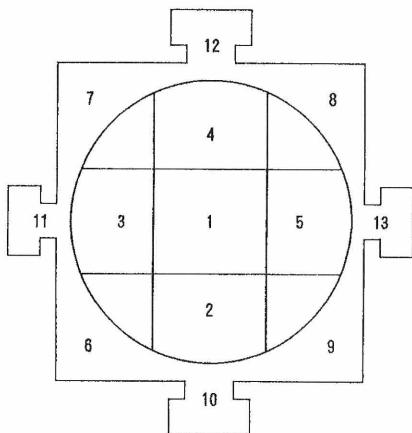
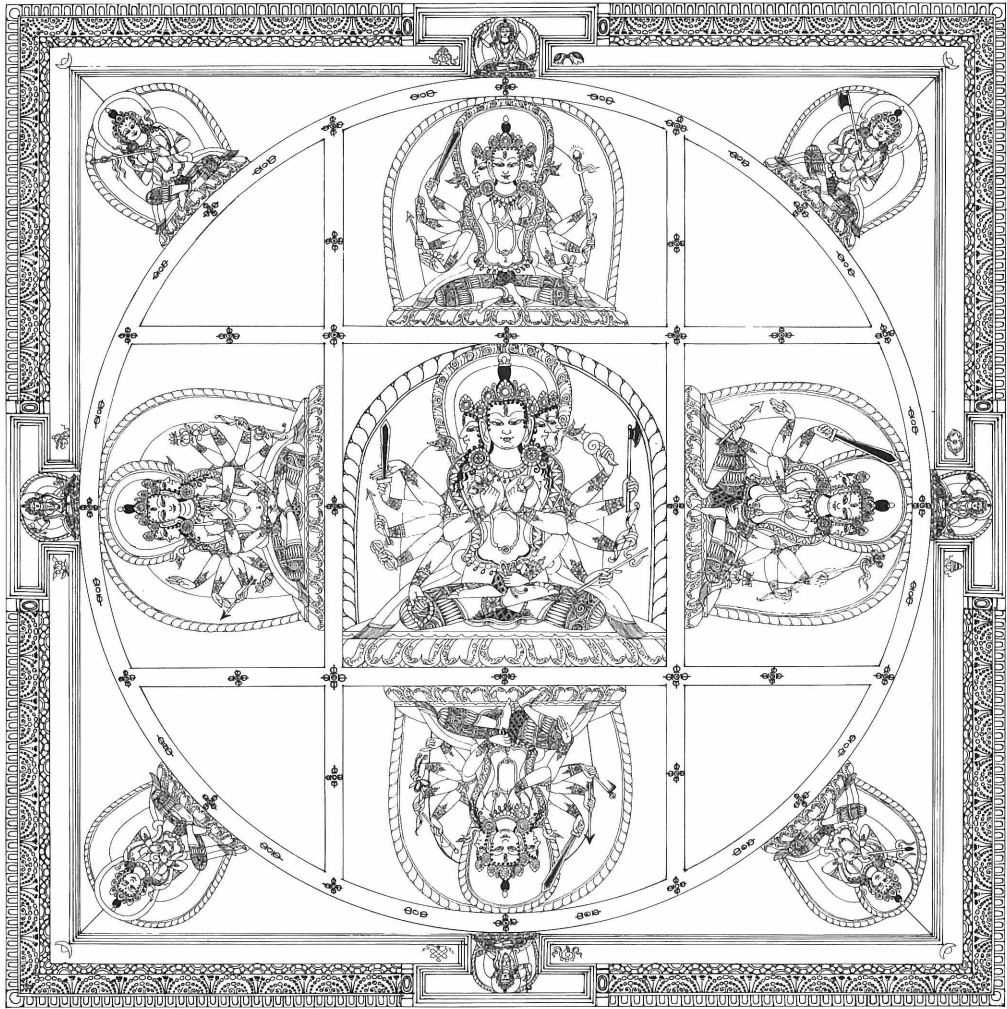
第十五章 ヤマーリ・マンダラ



第十六章 ヴァジュラターラー・マンダラ



第十七章 マーリーチー・マンダラ



第十八章 五護陀羅尼マンドラ

略号表の文献

- Bh: [Bhattacharyya 1949]
- C: *Nispannagogaṅgāvalī* Mss, Asha Archives, Kathmandu, No. 2-146.
- D: Tibetan Tripiṭaka, the sDe dge edition, No. 3141.
- E: *Nispannagogaṅgāvalī* Mss, National Archives, Kathmandu, No. 1/1113.
- G: *Nispannagogaṅgāvalī* Mss, National Archives, Kathmandu, No. 3/687.
- GDK: *rGyud sde kun btus*.
- Lee: [Lee 2004]
- N: Tibetan Tripiṭaka, the sNar thang edition, No. 1557.
- NPY: *Nispannagogaṅgāvalī*.
- P: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Suzuki Foundation, No. 3962.
- P2: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Suzuki Foundation, No. 5032.
- R: *Maṅḍalāvālī* Mss, The Institute for Advanced Studies of World Religions, New York, No. MBB II-224.
- SM: *Sādhanaṁālā*
- T: *Nispannagogaṅgāvalī* Mss, The Institute for Advanced Studies of World Religions, New York, No. WSG-20.
- TFP: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Suzuki Foundation.
- Bhattacharyya, B., *Nispannagogaṅgāvalī*, *Gaekwad's Oriental Series* No. 109, Oriental Institute, Baroda, 1949.
- Bhattacharyya, B., *Sādhanaṁālā*, Oriental Institute, Baroda, Vol. 1, 1968.
- Bühemann G. and Tachikawa M., *Nispannagogaṅgāvalī*, *Two Sanskrit Manuscripts from Nepal*, The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo, 1991.
- Lee, Yong-hyun, *The Nispannagogaṅgāvalī by Abhayākarakaragupta*, Baegun Press, Seoul, 2004.
- Lokesh Chandra, Tachikawa M. and Watanabe S., *A Ngor Maṅḍala Collection*, Mandala Institute, Nagoya & Vajra Publications, Kathmandu, 2006.
- Majumuria, T. C., *Religious and Useful Plants of Nepal & India*, Revised by D. P. Joshi, Dr. Rohit Kumar, Saharampur, India, 2009.
- Raghu Vira and Lokesh Chandra, *Tibetan Maṅḍalas (Vajrāvalī and Tantrasamuccaya)*, ŚATA-PIṬAKA SERIES, Indo-Asian Literatures Volume 383, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1995.
- Tachikawa, M. and Ito, M. (Compiled), "Buddhist Maṅḍala Deities—A Study of the *Nispannagogaṅgāvalī*—" 『ユブーラヤ地域における仏教タンントリズムの基層に関する研究』平成十四年度〜十七年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究成果報告書(研究代表者 立川武蔵)二〇〇六年。
- 岩本裕『密教経典・佛教聖典選第七卷』読売新聞社、一九七五年。
- 川崎一洋「チャトウシムボータ・タントラ」『インド後期密教』(ト)
- (松長有慶編著) 春秋社、二〇〇六年、一三一—一四四頁。

- 立川武蔵「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』吉川弘文館、一九八六年、六五―九七頁。
- 立川武蔵『完成せるヨーガの環』第十九章「金剛界のマンダラ」訳注「『密教図像』一四号、一九九五年、一―三三頁。
- 立川武蔵『完成せるヨーガの環』第二章訳注——『ペンディークラマ』（略次第）に述べられた阿閼マンダラ——『愛知学院大学文学部紀要』第三十五号、二〇〇五年、一二三―一二九頁。
- 立川武蔵『完成せるヨーガの環』研究(二)『愛知学院大学文学部紀要』第三十六号、二〇〇六年、一二九―一四四頁。
- 立川武蔵『完成せるヨーガの環』研究(二)『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第二十二号、二〇〇七年、一七九―一九八頁。
- 松長有慶(編)『インド後記密教「下」』春秋社、二〇〇六年。
- 森雅秀『完成せるヨーガの環』第一章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト『高野山大学密教文化研究所紀要』第七号、一九九四年、一四二―一三三頁。
- 森雅秀『完成せるヨーガの環』第11章「ヴァジュラフロンカーラ・マンダラ」訳およびテキスト『高野山大学論文集』（高野山大学創立百十周年記念論文集編集委員会編）高野山大学、一九九六年、一〇―一二四頁。
- 森雅秀『ヴァジュラーヴァリー』所説のマンダラ——尊名リストおよび配置図——『高野山大学密教文化研究所紀要』第十四号、二〇〇一年、三〇八―一九二頁。
- 山口しのぶ『ネパール密教儀礼の研究』山喜房佛書林、二〇〇五年。

